



父と共に歩む 森下家三代目 紙芝居師 森下昌毅さん

「周りの声に押されて」

森下昌毅さん（60歳）は、東日暮里在住。紙芝居師 森下家の三代目です。

父の正雄さんが亡くなった後、継いで欲しいとの周囲の声に押されて正雄さんの追悼公演で初めて人前で紙芝居を上演しました。仕事の傍ら、休日にボランティアで紙芝居を行っています。祖父の貞三さんは、街頭紙芝居の草分け、紙芝居の父ともいわれました。

紙芝居師の中から業界初となる勲六等瑞宝章を受章して95才まで現役でした。二代目の正雄さんもまた、昭和の街頭紙芝居師として有名です。晩年、喉頭癌のために声失っても自分のテープの語りに合せて口を動かす、新たな紙芝居のスタイルを確立して、亡くなる直前まで現役を貫きました。

「声をなくした紙しばい屋さん」（PHPノンフィクション）と正雄さんのことを書かれた本も出版されました。

「おやじと一緒にやっています」

昌毅さんは父の正雄さんから引き継いだ半天を着て実演しています。

舞台は祖父がヒノキで手作りしたも

ので幅は半間程あり、ずっしりと重みがあります。演目の「黄金バッド」は著名な紙芝居作家、加太こうじ氏の作品です。「カチ・カチ・カチと拍子木を打って」

荒川区は紙芝居師や画劇製作所も多かったことから紙芝居発祥の地と言われています。毎月第二土曜に荒川遊園地です。「黄金バッド」「手を振る子」「ポンチ」「トンチクイズ」などを披露しています。拍子木を打って園内を廻って紙芝居の開催を知らせると親子連れが集まって来ます。トンチクイズでは当たると下町高級グッズを子どもにプレゼントしています。

紙芝居は観客の反応を見ながら、紙芝居は絵の引き抜き方、声色、台詞回しなど演じ方を変える読み聞かせです。子どもの集中力、聴く力を養うだけでなく、高齢者のかたの記憶を蘇らせる効果もあると注目されています。

「見ている子どもの視線が楽しい。プレゼントがもらえなくて泣く子もいて」
そう話される昌毅さんの優しい笑顔。

祖父、父に師事することなく始めた昌毅さんですが、お父さんにそっくりとファンやお父さんの友人に太鼓判を押されている意味が判りました。声色や話し方だけでなく、写真で拝見したお父さんの笑顔と同じ、子どもや人に対する優しさが遺伝している気がします。



昌毅さんと正雄さん



「森下さんの奥さんでしょ。紙芝居を見ていました。」と見知らぬ方にバス停で話しかけられたという母の初枝さん。

紙芝居が衰退して行った中、生活を支えた初枝さんの内助の功があつて続いた伝統です。

森田家の紙芝居は、見た方の記憶に残っています。ご連絡頂ければ、昌毅さんがボランティアで紙芝居実演に伺います。昭和のゆっくりとした温かさを感じてみませんか。心に春風がそよぎます。

紙芝居師 森下昌毅さん

実演日程

荒川遊園地：第2土曜PM1時、2時30分

昭和館（九段下）：奇数月第4日曜日PM1時・2時・3時

三鷹市星と森と絵本の家：第3土曜AM11時30分・PM1時

連絡先：携帯090（8582）2785

dady.masaki.10649@docomo.ne.jp